

## 陳子昂「修竹篇」の創作背景と初唐詩研究の問題点 について

種村, 由季子  
九州産業大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/7337157>

---

出版情報 : 中国文学論集. 53, pp.35-46, 2024-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 陳子昂「修竹篇」の創作背景と初唐詩研究の問題点について

種 村 由 季 子

## 一 「修竹篇」の創作背景に関する先行研究

陳子昂は不遇な生涯を送った詩人である。則天武后の時代に生まれ、武后にその才を認められながらも、終に重用されることは叶わず、失意のうちに郷里に戻った。程なくして、彼の財産に目を付けた県令によって陥れられ、獄中で憤死した。久視元年（七〇〇）、四十二歳であった。死に際し彼は、

天命不佑、吾其死乎。

天命天命佑祐けず、吾其れ死せん。

（盧藏用「陳子昂別伝」『文苑英華』卷七九三、伝三）

と、天を仰ぎ叫んだと伝えられる。また彼の死後、友人の盧藏用は、

惜乎、湮厄當世、道不偶時、委骨巴山、年志俱夭、故其文未極也。

惜しきかな、当世に湮厄し、道時に偶はず、骨を巴山に委み、年志俱に夭す。故に其の文未だ極まらざるなり。

（盧藏用「陳伯玉文集序」『陳子昂集』）

陳子昂「修竹篇」の創作背景と初唐詩研究の問題点について

と、道半ばでの死を悼み、その才を惜しんでいる。<sup>(1)</sup>

ところで、陳子昂の代表作に、「修竹篇」がある。この作品では、青々と美しい姿を誇る「修竹」が、ある時、簫として新たに作り替えられ、天庭に招かれてその美しい音色を披露することとなる。そして「修竹」は、簫の能手である簫史や弄玉と共に昇天し、美しい理想郷を仙游する、という内容となっている。従来の先行研究では、これを陳子昂が「修竹」に自身を仮託し、自らの不遇を訴えて帰隱の意思を表明したものとされ、その創作時期については、彼が官を辞し、故郷の四川に隱棲する直前の作であるとされてきた。確かに、不遇であった陳子昂のイメージとよく合致することも相まってか、今日、「修竹篇」の解釈の一つとして定着しているが、これに対して論者にはいくつか疑問がある。

たとえば、「修竹篇」が、彼の帰隱の意思を詠んだ作品と考えられている理由の中に、結句の「永隨衆仙逝、三山遊玉京（永へに衆仙に随ひて逝き、三山玉京に遊ばん。）」がある。衆仙に随つて仙境へ赴かんとし、神仙世界への憧憬を詠んでいることから、この作品には、陳子昂の「掛冠之意」が込められていると解釈されているのである。<sup>(2)</sup> 陳子昂が官を辞して郷里に戻るのは、聖曆元年（六九八年）の秋頃であるから、創作時期はその直前、すなわち六九七年から六九八年の春夏頃まで、というのである。<sup>(3)</sup>

だが、そもそも陳子昂は仕官前の若い時分より道術に親しみ、作品にも、神仙にまつわる故事や語句が多く詠まれている。また、彼は隱逸士人「方外十友」の一員でもあった。そんな陳子昂が、作品中に神仙世界への憧憬を詠んだからと言って、それが果たしてそのまま、官を辞して帰隱するという行動に結びつくだろうか。他にも「修竹篇」の創作背景に関して、この説には再考の余地があると考えている。

一方で、「修竹篇」を、陳子昂が自身の遠大な抱負や理想の姿を詠んだ作品であると解釈し、その創作時期を、彼が科挙に及第し仕官した直後、すなわち光宅元年（六八四年）から垂拱二年（六八六年）の二年の間の作とする、韓理洲氏らの研究もある。「修竹篇」の創作時期に関する先行研究は、管見の限りではこの二つである。陳子昂の年齢と照らし合わせると、帰隱する直前の晩年の作であるならば、彼が四十歳前後の頃。科挙に及第してまもない、若き日の作であるならば、陳子昂は二十七歳前後である。

本論文では、真逆とも言えるこの二つの先行研究について、「修竹篇」の本文を精読し、改めて検討したい。そしてその上で、この作品が、出世を志す若き日の陳子昂の作であるとする韓理洲氏らの説を支持し、併せて詩人の生涯とそのイメージが、作品の解釈に影響を及ぼす傾向にある、初唐詩研究の現状についても言及したい。

## 二 陳子昂「修竹篇」の本文と解釈

「修竹篇」は、全三十六句の五言古詩である。便宜上、以下に全文を四段に分けて示す。<sup>5)</sup>

- |    |       |            |
|----|-------|------------|
| 1  | 龍種生南嶽 | 龍種南岳に生じ    |
| 2  | 孤翠鬱亭亭 | 孤翠鬱として亭亭たり |
| 3  | 峰嶺上崇峯 | 峰嶺の上崇峯として  |
| 4  | 煙雨下微冥 | 煙雨の下微冥たり   |
| 5  | 夜聞鼯鼠叫 | 夜は鼯鼠の叫ぶを聞き |
| 6  | 晝聒泉壑聲 | 晝は泉壑の声聒し   |
| 7  | 春風正淡蕩 | 春風正に淡蕩として  |
| 8  | 白露已清冷 | 白露已に清冷たり   |
| 9  | 哀響激金奏 | 哀響金奏よりも激しく |
| 10 | 密色滋玉英 | 密色玉英よりも滋し  |

「龍種」は、駿馬や俊傑など、優れた材に対する比喻であり、ここでは「修竹」を指す。修竹の生息地が「南嶽」であるのは、劉楨「贈從弟三首」其三（『文選』卷二十三）に「鳳凰集南嶽、徘徊孤竹根（鳳凰は南嶽に集まり、孤竹の根に徘徊す）」とあり、また司馬彪「贈山濤」（『文選』卷二十五）に「苕苕椅桐樹、寄生於南嶽（苕苕たる椅桐

陳子昂「修竹篇」の創作背景と初唐詩研究の問題点について

の樹、南岳に寄生す」とあるのを下敷きしているだろう。ここでは、修竹の素晴らしさと、その周囲の環境について詠んでいる。夜は「鼯鼠（ムササビ）の鳴き声が響き、昼は深い谷底から泉の湧き出る音が聞こえるほど。このような孤独と静寂の中で、修竹は気高く美しく成長したのである。

- 11 歳寒霜雪苦 歳寒くして霜雪苦だしくも  
12 含彩獨青青 彩を含みて独り青青たり  
13 豈不厭凝冽 豈に凝冽を厭はざらんや  
14 羞比春木榮 春木の榮を比するを羞づ  
15 春木有榮歇 春木榮歇有るも  
16 此節無凋零 此の節凋零すること無し  
17 始願與金石 始め金石と  
18 終古保堅貞 終古に堅貞を保たんことを願ふ

ここでは、極寒の冬にも耐え、修竹が青々とした変わらぬ姿を保ち続けている様が描かれている。しかし修竹はその美しさを誇ることも、競うこともせず、孤高の存在であり続けるのである。しかし、次の段落において、修竹に転機が訪れる。

- 19 不意伶倫子 意はず伶倫子の  
20 吹之學鳳鳴 之を吹きて鳳鳴を学ばんとは  
21 遂偶雲和瑟 遂に雲和の瑟に偶せられ  
22 張樂奏天庭 樂を張りて天庭に奏す  
23 妙曲方千變 妙曲方に千変し

- 24 簫韶亦九成 簫韶亦た九成  
 信蒙雕斲美 信に雕斲ちようたくの美を蒙り  
 26 常願事仙靈 常に仙靈を事とせんことを願ふ  
 27 驅馳翠蚪駕 驅馳す翠蚪の駕  
 28 伊鬱紫鸞笙 伊鬱紫鸞の笙

思いがけなく、「伶倫子」に見いだされた修竹は、新たに簫として生まれ変わることとなった。伶倫は、古代の樂人で、黃帝の命により崑崙山に赴き、嶰谷の竹から律管を作り、音律を制定したと伝えられる人物である。こうして簫として生まれ変わった修竹は、「天庭」に迎え入れられ、美しい音色でその才を發揮し、活躍の場を見つけていく。二十七句目の「翠蚪の駕」、二十八句目の「紫鸞の笙」は、笙の名手で、龍に乗り登仙した簫史を指すだろう。こうして、かつて孤高の存在だった修竹は、今や知己を得て、神仙世界に遊ぶこととなったのである。二十六句目の「仙靈を事とせん」とは、鮑照「升天行」(『文選』卷二十八)に「從師入遠嶽、結友事仙靈(師に従ひて遠岳に入り、友を結びて仙靈を事とす)」と、友と交遊し仙道を修める様を詠んだのを踏まえたものである。また二十八句目の「伊鬱」は、王褒「洞簫賦」(『文選』卷十七)に「於是乃使夫性味之宕冥、生不覩天地之體勢、聞於白黑之貌形、憤伊鬱而酷認、愍眸子之喪精、寡所舒其思慮兮、專發憤乎音聲(是に於いて乃ち夫の性味の宕冥にして、生れながら天地の體勢を覩ず、白黒の貌形に聞かぬ、憤り伊鬱して酷だ認へ、眸子の精を喪へるを愍へ、其の思慮を舒ぶる所寡きものをして、専ら憤りを音聲に発せしむ。)」とあるのを引用しており、これは、盲目の樂人が、言葉に言い表せない激情を、音楽に託して昇華する場面である。

- 29 結交羸臺女 羸台の女と結交し  
 30 吟弄昇天行 昇天行を吟弄す  
 31 攜手登白日 手を攜へて白日に登り

陳子昂「修竹篇」の創作背景と初唐詩研究の問題点について

- 32 遠遊戯赤城 遠遊して赤城に戯れん  
低昂玄鶴舞 低昂して玄鶴舞ひ
- 34 斷續綵雲生 斷續して綵雲生ず
- 35 永隨衆仙逝 永へに衆仙に隨ひて逝き
- 36 三山遊玉京 三山玉京に遊ばん

最後に「修竹篇」では、修竹が「羸台の女」、すなわち仙女の弄玉と共に「升天行」を吟じて登仙し、「三山」「玉京」を仙遊する姿が描かれる。

さて、この詩の解釈であるが、ここから官を辞する決意を固めるほどの、失意の情を読み取ることができるだろうか。むしろ、活躍の場を与えられ、簾として才を発揮し、さらには知己を得て仙境へと飛翔していく修竹の姿は、希望と期待に満ちているように感じられる。

すでに述べたとおり、先行研究では、この結句「永へに衆仙に隨ひて逝き、三山玉京に遊ばん」が、陳子昂の帰隱の意思の表れとも解釈されるのであるが、彼は郷里におり出仕をする前から、暉上人という人物と交遊し道術に傾倒している。陳子昂にとって、神仙世界への憧憬や隱逸への思いは、必ずしも失意や掛冠に結びつくわけではないのである。

次に挙げるのは、光宅元年（六八四年）、二十七歳の時の作である。この詩の前年に、陳子昂は則天武后と謁見し「諫靈駕入京書」、「諫政理書」を献上する機会を得た。武后は彼の文を高く評価し、陳子昂を麟台正字に抜擢した。当時の陳子昂は、自らの明るい官途を信じて疑わなかったことだろう。

平生白雲志 平生、白雲の志

早愛赤松遊 早に愛す赤松の遊

事親恨未立 親に事へて未だ立たざるを恨み

從宦此中州

宦に此の中州に従ふ

主人亦何問

主人亦た何ぞ問ふ

旅客非悠悠

旅客悠悠たるに非ず

方謁明天子

方めて明太子に謁し

清宴奉良籌

清宴良籌を奉ず

再取連城壁

再び連城の壁を取り

三陟平津侯

三たび平津侯に陟らん

不然拂衣去

然らざれば衣を払ひて去り

歸從海上鷗

歸りて海上の鷗に従はん

寧隨當代子

寧ぞ當代の子に随ひ

傾側且沈浮

傾側し且つ沈浮せん

(陳子昂「答洛陽主人」『陳子昂集』卷二)

ここでは、平生から隱逸の志を持っており、世俗の名声に囚われることなく、カモメと共に世を避けて生きようとする考えが詠まれている。だが同時に、蘭相如や公孫弘のように、官僚として活躍したいという希望と熱意も詠まれている。このように、陳子昂にとって、仙界への憧憬と、官界への熱意は、決して相反する物ではなく、二つながら同時に存在し得る関係なのである。韓理洲氏の説に従えば、「修竹篇」と「答洛陽主人」はほぼ同時期の作という事になるが、「修竹篇」において、修竹が自身の才を揮い、仙界への憧憬を強めていく様と、この詩の構造はよく重なる。

### 三 「修竹篇」の序文と創作背景

「修竹篇」は、正確には詩題を「與東方左史虬修竹篇」(「東方左史虬に『修竹篇』を与ふ」という。この題から、

陳子昂「修竹篇」の創作背景と初唐詩研究の問題点について

左史の東方虬に献上した作品であることがわかる。そしてこの「左史」という官職名が、「修竹篇」の創作時期を聖暦元年（六九八年）とする説の、もう一つの根拠となっている。まずはその序文を見ていこう。

東方公足下、文章道弊五百年矣。漢魏風骨、晉宋莫傳。然而文獻有可徵者、僕嘗暇時觀齊梁間詩、彩麗競繁、而興寄都絕、每以永歎。思古人、常恐逶迤頽靡、風雅不作、以耿耿也。一昨於解三處、見明公詠孤桐篇。骨氣端翔、音情頓挫、光英朗練、有金石聲。遂用洗心飾視、發揮幽鬱。不圖正始之音、復覩於茲。可使建安作者相視而笑。解君云、張茂先、何敬祖、東方生與其比肩。僕亦以爲知言也。故感歎雅製、作修竹詩一篇。當有知音以傳示之。

東方公足下、文章の道弊やぶれて五百年なり。漢魏の風骨、晉宋に伝はる莫く、然れども文獻もんけん徴ちゆうむるべきもの有り。僕嘗て暇時齊梁間の詩を觀るに、彩麗繁を競ひ、興寄都て絶ゆるに、毎に以て永嘆す。古人を思ふに、常に透い遙い頽靡し、風雅の作おこらざるを恐れ、以て耿耿たるなり。一昨解三の処に於いて、明公の「詠孤桐篇」を見る。骨氣端翔し、音情頓挫し、光英朗練として、金石の声有り。遂に用て心を洗ひ視を飾り、幽鬱を發揮す。凶らざりき正始の音、復た茲に觀んとは。建安の作者をして、相視て笑はしむべし。解君云ふ、「張茂先、何敬祖、東方生與に其れ比肩す。」と。僕も亦た以爲へらく知言なり、と。故に雅製に感嘆し、「修竹詩」一篇を作す。當に知音の以て之を伝示する有るべし。

〔與東方左史虬修竹篇并序〕『唐文粹』卷十七<sup>(6)</sup>

ここでは、陳子昂が文章の道から漢魏の風骨が失われたことを嘆いていた所、「解三」邸で東方虬の「詠孤桐篇」を目にしたと述べる。そしてこれに感銘を受けた彼は、「修竹篇」を制作し、東方虬に献上することになった、という創作の動機を述べている。東方虬については伝記がなく詳細は不明であるが、宋之問の伝記に東方虬が左史であった頃のエピソードが残っている。

預修三教珠英、常扈從遊宴。則天幸洛陽龍門、令從官賦詩。左史東方虬詩先成、則天以錦袍賜之。及之間詩成、則天稱其詞愈高、奪蠻錦袍以賞之。

〔宋之間〕『三教珠英』を預修し、常に遊宴に扈從す。則天洛陽龍門に幸し、從官をして詩を賦せしむ。左史東方虬の詩先に成り、則天錦袍を以て之に賜ふ。之間の詩成るに及び、則天其の詞愈高きを称え、虬の錦袍を奪ひ以て之を賞す。〔旧唐書〕宋之間伝

これは、東方虬が、龍門での宴の席で、宋之間と詩の優劣を争い、先に東方虬が優れた詩を書き上げ、褒美を得たが、遅れて完成した宋之間の詩が素晴らしかったので、東方虬から褒美を取り上げて宋之間に下賜した、という内容である。

『三教珠英』は則天武后の勅命による類書で、その編纂時期は、聖暦元年（六九八年）から大足元年（七〇一年）である。この話に登場する東方虬が左史の職にあることから、陳子昂が「修竹篇」を東方「左史」虬に献上したのもここから遠くない時期とされる。ただし陳子昂は六九八年秋には官を辞しており、また万歲通天二年（六九七年）七月までは、書記官として北征していたため、その創作時期は神功元年（六九七年）秋から聖暦元年（六九八年）春夏頃と考えられている。

だが、詩題が後世の編纂によって改変されるといった例は、古典文学では散見される。実際、陳子昂の作品にも、恐らくは盧藏用によって手を加えられたと思われる痕跡が指摘されている。ならば、「與東方左史虬修竹篇」という詩題もまた、陳子昂自ら付けたものと断定することはできないのである。

ところで、東方虬作「詠孤桐篇」を陳子昂が目にするきっかけとなった「解三」（「解君」）であるが、この人物は、解琬といい、辺境の経営に才を發揮した武将である。武后の信頼も厚く、安撫先の住民からも慕われていたという。陳子昂とは、調露二年（六八〇年）、洛陽の高正臣邸での宴にて同席し、二人は応制詩を残している。

#### 主第簪裾出 主第簪裾出で

陳子昂「修竹篇」の創作背景と初唐詩研究の問題点について

王畿春照華 王畿春照華やかなり

山亭一以眺 山亭一たび以て眺め

城闕帶煙霞 城闕煙霞を帯ぶ

横堤列錦帳 横堤錦帳を列ね

傍浦駐香車 傍浦香車を駐む

歡娛屬晦節 歡娛して晦節に属し

酩酊未還家 酩酊して未だ家に還らず

(解琬「晦日宴高氏林亭」『全唐詩』卷一百五)

尋春遊上路 春を尋ねて上路に遊び

追宴入山家 宴を追ひて山家に入る

主第簪纓滿 主第簪纓滿ち

皇州景望華 皇州景望華やかなり

玉池初吐溜 玉池初めて花を溜を吐き

珠樹始開花 珠樹始めて花を開く

歡娛方未極 歡娛方に未だ極まらざるに

林閣散餘霞 林閣余霞を散ず

(陳子昂「晦日宴高氏林亭」『陳子昂集』卷二)

韓理州氏によると、「修竹篇」の創作時期は、光宅元年（六八四年）から垂拱二年（六八六年）頃とされる。この時期、陳子昂は進士に及第し官途を歩み始めたばかりの、二十七歳の若者である。二十ほど年の離れた解琬と、宴に同席するうちに親しくなり、邸に招かれて東方虬の「詠孤桐篇」を目にした、という流れは、極めて自然ではないだろうか。

#### 四 初唐詩研究の問題点について

陳子昂は、不遇な生涯を送った詩人である。だが、そのことが「修竹篇」の解釈にまで影響を与えているとすれば多分に問題である。しかしながらこの現状は、陳子昂に限らず、他の初唐詩人の作品にも言える。論者はこれまで、宋之問の「明河篇」や李嶠の「宝剑篇」について考察を行っているが、悲劇のイメージが強い陳子昂とは対照的に、宋之問や李嶠は権力者に阿る軽薄なイメージが強い。そしてそのイメージが、彼らの作品にも大きく影響を与えている、と指摘してきた。

このような初唐詩研究の現状については、先行研究においても、「今日の学术界は、武后や中宗の宮廷詩人たちに對し、その人品や詩文を批判的に捉え、彼らを卑劣だと認識し、詩文には諂媚の氣風が強く、剛健な作品が少ない」と指摘がある。また、初唐の存在が、「盛唐の詩人の理想的な人格の建立や盛唐文学の到来の為に必要な準備と下地作りを用意した」として、初唐詩研究の価値を説く。

だが、論者はここにも、問題点があると考え。つまり、初唐詩研究は、六朝から盛唐へと詩歌が変化していく過程を説明する役割としてしばしばその価値を期待されており、六朝の華やかな貴族詩から、盛唐の杜甫や李白が活躍する黄金期にかけての、いわゆる過渡期の文学として、ややもすれば軽視される傾向にある。詩人の生涯とその文学性が密接に関わり合っているのは古典の常ではあるが、それがあまりにも偏っているのが、初唐詩研究の現状ではないだろうか。今後さらに、初唐の詩人たちの作品に焦点を当てて再評価し、研究を一層進めていきたい。

#### 注

(1) 陳子昂の生涯については、両唐書本伝、盧藏用「陳子昂集序」及び「陳氏別伝」、また趙儋「大唐劍南東川節度觀察処置等使戸部尚書兼御史大夫梓州刺史鮮于公爲故右拾遺陳公建旌德之碑」を参考にした。

(2) 彭慶生『陳子昂集校注』(黄山書社、二〇一五年)の「修竹篇」注釈に、「又詩云『永隨衆仙去、三山遊玉京』、實隱陳子昂「修竹篇」の創作背景と初唐詩研究の問題点について

寓掛冠之意、故本篇当作於神功元年（六九七年）東征凱旋之後、聖歷元年（六九八年）歸隱之前。」とある。

- (3) 前掲注(2)及び傅璇琮主編『唐五代文学編年史』初盛唐卷（遼海出版社、一九九八年）、彭慶生『初唐詩歌系年考』（北京大学出版社、二〇一二年）。また、頼晶・範元莉「陳子昂『修竹篇』干謁目的發覆」（『南昌師範學院學報』第五期、二〇二〇年）など。

- (4) 韓理洲『陳子昂研究』（上海古籍出版社、一九八八年）に、「修竹詩」当は懷着遠大抱負、崇高理想的詩人、在六八四年到六八六年北征前的暫時順境期間所作。写在本詩前面的序、也当作於此時。」とある。また、徐文茂『陳子昂論考』（上海古籍出版社、二〇〇二年）、及び高木正一『六朝唐詩論考』（創文社、一九九九年）も同様の立場をとる。

- (5) 「修竹篇」の本文は、徐鵬校点『陳子昂集』（上海古籍出版社、二〇二二年）を底本とし、適宜、彭慶生『陳子昂集校注』（黃山書社、二〇一五年）を参照した。「修竹篇」は卷一に収録される。

- (6) 他に『唐詩紀事』卷七に「寄東方左史修竹篇序」、「唐詩品彙」卷三に「修竹篇與東方左史虬并序」とある。なお、前掲注(5)『陳子昂集』及び『陳子昂集校注』では、いずれも「修竹篇」并序」となっている。

- (7) 永田知之「詩人と伝記作者——盧藏用が抱いた文学館と陳子昂の形象化——」（『中国文学報』第六十四冊、二〇〇二年）参照。

- (8) 孫慎行「三月三日宴王明府山亭序」（『歲時雜詠』卷十六）に、「調露二年、暮春三日、同集于王令公之林亭…。」と。

- (9) 拙論「宋之問『明河篇』と初唐の公主たち」（『中国文学論集』第四十六号、二〇一七年）、及び「李嶠『宝剑篇』創作考——昇仙太子の劍を手がかりとして——」（『九州中国学会報』第五十九卷、二〇二一年）参照。

- (10) 杜曉勤『初盛唐詩歌的文化闡釈』（東方出版社、一九九七年）に、「学术界对此一時期宮廷詩人的人品和作品大多持批評態度、認識武后、中宗宮廷詩人人品普遍卑下、詩文多有諂媚氣、少剛健之作。」と指摘がある。

- (11) 注(10)に同じ。「但是、如果我們將武后、中宗朝宮廷詩人群体的心態特徵放在齊梁詩人心態向盛唐詩人心態嬗變的這一大過程中考察、尤其是注意到開元中前期詩人心態與此一時期宮廷詩人心態之間存在着密接關係的話、就会發現、此一時期宮廷詩人的文化心態和詩歌品格并不是毫無可取之処、而是在某些方面為盛唐詩人的理想人格的建立和盛唐之音的到來作了必要的鋪墊和準備。」とある。